

【登場人物表】

宮本 一郎 (41)	信用金庫の職員
保坂 リカ (40)	銭湯の看板娘
保坂 慎太郎 (70)	リカの養父
宮本 早苗 (67)	一郎の母
小泉 (27)	宮本 一郎の部下
都丸 さつき (34)	一郎の妹
都丸 功 (31)	妹の夫
都丸 かなた (8)	妹の長男
都丸 はると (5)	妹の次男
加藤 洋子 (36)	主婦
加藤 博 (14)	洋子の長男
加藤 若菜 (7)	洋子の長女
一場 ゆか (43)	宮本 一郎の上司

○宮本の部屋

マンションの一室。  
戦隊もののフィギアが所狭しと飾って  
ある棚がある。  
その横のベッドで眠っている宮本一郎  
(41)

○(夢)レスリング会場

宮本は覆面プロレスラーの恰好。  
戦っている相手は悪人っぽい風貌のレ  
スラー。  
宮本のキックがバシッと決まり、相手  
が倒れる。  
ドレスを着た顔の見えない女性が駆け  
寄り、宮本に抱きついてくる。  
キスをしようとした瞬間、ピンポーンと  
チャイムの音。女性の顔をみると宮本  
早苗(67)である。

宮本「母ちゃん!?」

早苗「ピンポーン(チャイムの音で)」

○元の宮本の部屋

くたびれたスウェット風のパジャマで  
無精ひげが生えている宮本がスマホで  
電話している。

目の前には、梱包を解いた段ボール箱  
が4つ。

1つは缶詰、うどん、金平ごぼうなど  
の総菜が入っている。

あとは全部、ユズである。

宮本「…何なんだよ、これ。うどんはいいよ。

食べるよ。冷凍はするよ、そりゃ。って、

冬至がくるからって、このユズは。ありす

ぎるだろ！…うん、大丈夫だよ。え？平気、

それは。何を心配してるんだよ、俺、母ち

ゃんの息子だよ。そういうのは…だ、か、

ら、仕事は大丈夫だって！…って何？ユズ、

ユズって…はあ？紛らわしいだろ、それ。

…大家さん？今ないの、そういうのは。

あ？言っただろ、一人が楽だって。え？

何？」

○宮本一郎の実家・台所

農作業姿の早苗、携帯で話し中。

早苗「どこも痛くなくてやる事があるのが大事：何？切れたわ」

早苗の横には、茶トラの猫がいる。

早苗「ねー？ゆずちゃん。うちの息子は何で  
トコになっても結婚しないんですかねー？」

○宮本のマンション

宮本、ベランダで洗濯物を干している。  
街の風景をみると、銭湯の煙突がみえる。

宮本「これだ！」

○銭湯「万の湯」の入り口

銭湯「万の湯」の看板を背に保坂リカ  
(トコ)が箒で道路を掃いている。

リカの恰好は、スウェットとジーパン。

リカは左足を引きづっており、箒を杖  
替わりに使っている。

リカの目の前、宮本が通りすぎる。

リカ「（小声で）さっきもいた。開店は夕方だ  
つつーの！看板みるや」

と、また宮本がこちらに歩いてくる。

リカあわてて宮本から目をそらす。

リカ「まさか、私に用事？え？告白？（自分  
の恰好を見て）：いや、それはないか」

過ぎ去っていく、宮本をちらっとみて、

リカ「わかった！あれだ。あのジジイの息子

か、そういう事か！」

宮本の声「：あの、すいません」

リカ「ひい！でもあれは、正当防衛」

宮本「セイトウボウエイ？」

○ 銭湯の口ビ―

宮本、椅子に座っている。

リカがフル―ツ牛乳を持ってくる。

リカ「いるのよね―。裸の付き合いしてる

と、思っ、て、人の体、触っていいと思う奴」

宮本「はあ」

リカ「そのジジイ。いや、おじいちゃんの息  
子か何かと思っちゃって」

リカ、躓きそうになり、宮本は思わず  
立ち上がりリカを支えようとする。

リカ「いらないから！そういうの」

宮本「え？」

リカ「：（笑って）大丈夫、大丈夫」

宮本「：」

リカ「ほら座って。はいこれ」

フルーツ牛乳の瓶を宮本に渡す。

リカ「やっぱこれでしょ。そうだ冬至の日、

入りに来てよね。サービスするから」

宮本、しみじみフルーツ牛乳をみつめ

ている。

リカ「え？飲んでよ」

宮本「：これ、何のフルーツ入ってます？」

リカ「え？」

宮本「初めてなので」

リカ「知らないの？フルーツ牛乳を？」

宮本「あんまり食べなれないものは、ちよっ

と：「

リカ「いるんだ。この世に、そんな化石みたいな人」

宮本「化石？！」

リカ「もしかして銭湯とか行ったことないとか？」

宮本「ありますよ！普通に」

リカ「いやいや、銭湯にないわけないっしょ」

宮本「ありましたよ。町でやってるちゃんとしたやつ。観光客とかきてたし」

リカ「：それ、めっちゃ察した。もしかして銭湯の看板娘に、喧嘩売ってる？」

宮本「そっちでしょ！それは！」

リカ「：まあ、そうか。ごめん、ごめん」

宮本「もしかして、うどんには天ぷらって、思ってますせん？」

リカ「何、急に。当たり前でしょ」

宮本「これだから、都会の人間は」

リカ「何？ちよっと！海老天のせないの？」

宮本「うどんには『金平ごぼう』ですよ」

リカ「何それ」

宮本「別にいいですよ。海老天でもちくわ天でも乗っければ、都会の人は」

リカ「：」

宮本「でも場所が変われば常識も変わるんです。僕の田舎で、海老天のせたら笑われますね」

リカ「そっか、場所か。：金平。いいね、それ」

宮本「でしょ？」

リカ「じゃあ、これも金平にならないかな？」

リカ、自分の左足を指でさす。

宮本「え？」

リカ「どこかの街では笑われなくてすむならさ」

宮本「そういう意味で言ったんじゃない？」

リカ「大丈夫。わかつているから。お客さんはそういう人じゃないって」

宮本、立ち上がり、

宮本「：出直してきます」

リカ「へ？」

宮本「ちよっと待ってください。うどんと金平ごぼう持ってきます」

リカ「え？」

宮本「食べないとわかんないでしょ、おいしさは！」

リカ「ちよ、ちよっと。これ（フルーツ牛乳）は？」

リカがぼかんとした顔で見ている中、  
宮本、銭湯を飛び出す。

## ○ 道路

走る宮本。今日一番の笑顔。

冬の青空が広がっている。

## ○ リカの家・食卓（朝）

食卓の上に、どーんとあるのは、ゆでたうどんと金平ごぼう。

それを見ているのは、保坂慎太郎（ㄥ〇）  
リカ、パジャマ姿である。

リカ「おはよー、おとうちゃん」

慎太郎「これ、いつまで食わなきゃなんだ？  
リカ「食わなきゃ悪いでしょ」

慎太郎「あの男はなんなんだ？ だいたい、う  
どんには海老天だろが」

リカ「そうだけど……。金平も結構おいしいよ。  
これ手作りみたいだし」

慎太郎「おれはもう、うどんは食わんからな。

リカ「白いごはん！」

リカ「はいはい」

○保奈美信用金庫・社内

宮本のデスク。

『ほなみ信用金庫、宮本課長』と書か  
れたプレートと、小さな戦隊モノのフ  
ィギアが並んでいる。

宮本、自分の席でうどんと金平ごぼう  
の弁当を食べている。

スーツ姿の小泉（こゝ）がやってくる。

小泉「宮本課長ー、たまには外でごはん：っ

て、またこれっすかー」

宮本「何だよ、食べたい？」

小泉「いいつつす。俺、ラーメン派なんで。(フイギアの人形をみて)うわあ、全部そろえたんすか！」

宮本「それは絶対あげない」

小林「いいなー、課長。自由に使えるお金あったって」

宮本「小遣い、また減ったのか？」

小林「ばれたんです。この前買ったやつが」  
宮本「これだから結婚なんて」

小林「でた！課長の女嫌い。昔、なんかあったんすか？」

宮本「他人に干渉されたくないだけ」

小林「他人って：あいかかわらず、こじれてますねえ：」

一場ゆか(トコ)がにこやかな笑顔で登場。

一場「何を話しているのかなー？お2人は」  
小林「げ、代理：」

一場、書類を宮本に渡しながら

一場「はい、この融資は再検討！どうしてこれに許可出したのかなー」

宮本「地元密着がここの売りでしょ」

一場「だから？」

宮本「誰のためにここがあるかって」

一場「宮本君。頭いいんだからわかるでしょ。

元、銀行員なんだし」

宮本「どういう」

小林「あのすいません。僕がそれ取ってきた融資で：」

宮本、一場をじっとみている。

小林、ちよつとあたふたしている。

一場「（ため息ついて）：あのね。言っとくけど、再検討」

小林「え？」

一場「小林だけだと、上手くいかないからお願ひしてるの、こっちは！」

宮本「：」

一場「あとうちは地元密着」

宮本「え？」

一場「他人じゃないの。人と人で繋がってんの。干渉し合って生きてちようだい」

一場、そういつて席に戻っていく。

宮本「何、言っただ？」

小林は意味がわかって、笑っている。

○保坂家の居間

リカ、丸の内OLが着ていそうないメ  
ージの女子スーツを着ている。いつも  
より化粧も濃いめである。

慎太郎「：気合いれすぎじゃないか？」

リカ「ここで入れなきゃ、どこでいれんの」

慎太郎「そうかな？」

リカ「これで、できる経営者にみえるでしょ」

慎太郎「：うーん」

○銭湯「万の湯」・外観

スーツ姿の宮本と小林が銭湯を見上げて  
いる。

宮本「やっぱり、ここか」

小林「へー課長、ここ来たことあるんですか？」

宮本「まあ、そういうことかな」

○同・入口

小林「ほなみ信用金庫の小林です」

リカの声「はい。どうぞー」

○同・入口（中）

小林と宮本が入ってくる

小林「今日は、お時間いただきまして」

リカ「（気が付いて）あ！」

宮本「：どうも、この間は」

小林「え？知り合いなんすか？」

○同・ロビー

ロビーの椅子席に座る、宮本、小林、  
リカ。

慎太郎がお茶をもって登場してくる。

慎太郎「すいませんねえ、うちの娘、椅子じ

やないとだめでして」

宮本「あの、お父さんもこちらに」

慎太郎「いやいや、自分のせいで経営が傾い  
ちやつたもんでして」

宮本「え？ どういう？」

リカ「そうなんです、実は」

慎太郎「じゃあ年寄りにはひっこみますんで、  
若いもんだけでお話を」

宮本「はあ」

小林を挟んで、宮本とリカがお見合い  
のように、向き合う感じに座る。

リカ、宮本たちが持ってきた書類と名  
刺を確認している。

リカ「とりあえず、あれですよね。ここにお  
2人きたってことは、お金借りるのに条件  
とか必要って事ですよね？」

小林「あー、話をずばつと、進めていただい  
て。：去年のこの経営状況を考えますと」

リカ「金平さん、宮本って名字だったんだ」

宮本「はい。宮本一郎と申します」

リカ「あ、私は、保坂リカといいます。ご存  
じの通り、銭湯を営んでおります」

小林「ちよ、ちよつといいつすか？なんで、  
宮本課長が金平さんなんです？」

リカ「まあ、そこはいろいろと」

宮本「ユズ貰ってもらったんだよ。この前」

小林「ユズ？ユズってあの冬至の時に風呂  
にを入れるユズ？」

宮本「そう、それ」

小林「なんで？」

宮本「まあ、いろいろとあって」

リカ「そう、いろいろと」

小林「なんなんすか、それ」

宮本とリカ、2人顔を見合わせて、ち  
よつと照れている。

小林「え？じゃあ、冬至の日、ユズ湯にはい  
れるってこと？ここの銭湯で」

リカ「そういう事かな。あ、ユズ持ってきま  
しょうか？」

宮本「あ！お前、ユズ欲しかった？悪かったな、あげなくて」

小林「まあ、欲しいか欲しくないかって言われたら、そりゃ：」

リカが立ち上がろうとしており、それを宮本が心配そうにみている。

小林、その2人をみて

小林「（わざとらしく）そうだ！それって、お客をよぶチャンスですよね？」

リカ・宮本「え？」

小林「キャンペーンですよ！」

## ○商店街

宮本、戦隊ものの服装でチラシを配っている。

リカは妖精のような魔女のような恰好。

ユズが入ったバックを肩から下げている。持っている、杖はなぜかカボチャ

の飾りが付いている。

リカ「で、結局、小林くんはこないわけ？」

宮本「風邪ひいちゃったって連絡あって」

リカ「だって発案者、彼でしょ？」

宮本「確かに」

リカ「確かについて……。よくよく考えると、

わたしたち変じゃない？」

宮本「変？」

リカ「宮本さん、なんでそんな服もってるの？」

宮本「集めているから」

リカ「え？」

宮本「保坂さんこそ、その恰好、何を目的に

しているのかわからない」

リカ「冬至といたら、かぼちゃでしょ」

宮本「そうだっけ？」

リカ「冬至といえば、かぼちゃ。かぼちゃと

いえばシンデレラでしょ」

宮本「で、これがシンデレラ？」

リカ「ざんねーん。良い魔女です」

宮本「：なんで？」

リカ「だって魔法はかけられるより、かける

ほうが楽しいでしょ？」

宮本「そっか：」

UOMほど先に買い物をしている母親  
と子供たちがみえる。

リカ、それを見て

リカ「よし。魔法かけてこよっと」

宮本「：わかるかなあ、魔法使い」

× × ×

加藤洋子（30）、加藤博（14）加藤若菜  
（7）の家族づれに、近づく宮本。

リカは杖をついているので後からゆっ  
くり歩いている。

宮本「あー」

洋子「なに？（宮本の恰好をみて）何者？！」

宮本「：すいません。怪しいものじゃないで  
す」

若菜「このおじさん、変ー」

洋子「若菜、そういう事は」

宮本「変です。変ですけど、一応、銭湯の宣  
伝できました」

チラシを洋子に渡す、宮本。

洋子「ユズ湯？冬至って事？」

宮本「ユズの妖精、ゆずっしー」

洋子「ええ？！」

宮本「：あ、冗談です」

若菜「ねーおじさん、あの人と結婚してるの？」

リカが杖をつきながら、こちらに向か  
って歩いてくる。

洋子「わあ、妖精？夫婦で趣味が一緒って  
いすねえ」

宮本「いや、夫婦では：」

若菜「みて！お兄ちゃん。魔法の杖、もつて  
るよ」

リカやっとな追いついて

リカ「はい、到着しました。銭湯『万の湯』  
よろしくお願いしまーす。これ、魔法のユ  
ズ」

ユズを、若菜にわたす。

若菜「いい匂い。お兄ちゃん、この人、魔法

少女ララちゃんみたいだね！」

リカ「はい、ぼくにも。ララからプレゼント」

博、無言でユズをうけとる。

洋子「ほら博。お礼いいなさい」

博「…なんで、そんな恰好で歩いてんだよ」

リカ「え？」

博「魔法の杖なんか、あるわけないだろ」

リカ「…」

博「この人足悪いから、仕方なく杖使っているんだよ」

洋子「博！」

若菜「お兄ちゃん！」

博、走って逃げていく。

洋子「すいません、本当に」

リカ「：大丈夫です。私も調子にのってたんで」

洋子「すみません。あの子、魔法少女ララのこと、好きだったんですけど…」

リカ「あー私、ララちゃんには似てないですもんね」

宮本「：きつと、今でも大好きですよ。ララちゃんのこと」

洋子「そうですか？」

宮本「ええ。絶対に」

宮本のやけに真面目な顔をみて、リカ  
驚く。

若菜「：ねえ。早く探さないとお兄ちゃん、  
すねちゃう」

リカ「そう、はやく行ったほうが」

洋子「ほんとすいません。冬至の日、いきま  
す、必ず」

洋子、謝りながら若菜をつれて去って  
いく。

宮本「：あの子、たぶんですけど」

リカ「ん？」

宮本「いいんです、大した事じゃないんで。

あ、魔法使いってのは、通じましたね」

リカ「まあ、仕方ないのはホントだしね：」  
宮本「え？」

リカ「さて、チラシ配り終わるまで、頑張り  
ましょ！」

元気いっぱいになり力歩き出す。

○ 銭湯・洗い場（夜）

湯舟にはユズがぷかぷか浮いている。

○ 同・番台（夜）

番台に座り、リカは時計を眺めている。

∞時半過ぎである。

お客は、人ほどである。

スーツ姿の宮本がやってくる。

宮本「遅くて、すみません」

リカ「遅い。店しまっちゃうよ」

宮本「どうです？お客さんは？」

リカ「：まあまあかな。あ、あの親子もきた

よ。男の子は来なかったけど」

宮本「：」

リカ「気にしてたからさ」

宮本「すみません」

リカ「なんで宮本さんが謝るの？」

宮本「ユズ湯入ります」

リカ「：うん」

リカ、番台の下で自分の動かない足を擦る。

○同・入口（夜）

リカ、杖をつきつつ、銭湯の暖簾をはずしに外にでる。

電灯に照らされた電柱の下に博が立っている。

リカ「寒くないの？」

首を横にふる、博。

博「：ひどいこと言ったから」

リカ「いいよ」

博「：」

リカ「わかっていてから来たんでしょ」

博「：」

リカ「ホント寒いから、入っていきなよ。ちようどいるよ、あのおじさんも」

博「：苦手なんだ。誰かが触れた物とか」

リカ「え？」

博「変わりたいけど変われない」

リカ「……」

博「ごめんなさい」

博、そのまま走り去る。

○ 銭湯のロビー

風呂上りの宮本がやってくる。

ロビーに突っ立っているリカを見て、

宮本「僕が最後でしたね。遅くなっちゃって」

リカ「：きたよ、あの男の子」

宮本「え？」

リカ「変わらないんだって」

宮本「どっち、いきました？」

リカ「もう結構、前：」

宮本「探してきます」

濡れた髪のまま、外にとびだす宮本。

リカ「（独り言のように）変わらない、かあ……」

リカ、動かない足をじっと見る。

○ 商店街（夜）

シャツターが締めまり、人通りのすくな

い街並み。

宮本、周りをみながら走る。

酔っ払いの男が歩いており、その宮本を不思議そうに見る。

○河川敷（夜）

河川敷の土手に立つ、宮本。

川の水は暗くてまったく見えない。

遠くの街の灯りだけがキラキラとみえる。冷たい風が吹いている。

○銭湯・入り口（夜）

万の湯の入り口で、リカと慎太郎が立っている。

慎太郎「お、帰ってきたな」

リカ「会えた？」

宮本「会えなかった、です」

リカ「：そっか。寒かったでしょ」

宮本「大丈夫」

慎太郎「大丈夫なわけあるか。もう一回うち

の風呂に入っていけ」

リカ「そうだよ」

宮本、無言で中にはいっていく。

○ 銭湯・ロビー

宮本「…何やってんのかなって思いますよね」

リカ「宮本さん、そういう人でしょ」

宮本「～人、外で寒かったでしょ」

慎太郎「おれはついさっき風呂入ってるから」

宮本「じゃあ、あのリカさん」

リカ「え?!」

宮本「お風呂どうです? もちろん一緒にいっても、女湯ですけど」

慎太郎「そりゃあ…」

リカ「(慎太郎を制するように)うん! そーだね、はいろ。はいろ」

慎太郎「リカ、お前…」

リカ、ニコニコ笑っている。

○ 銭湯・男湯

ユズ湯につかっている宮本。

宮本「すごく、気持ちいいです」

リカの声「そお？」

宮本「いいですね、大きいお風呂」

リカの声「でしょ。私、この銭湯、大好きなんだ。お風呂でみんなで疲れ癒して、一日の終わりをここですごして：」

宮本「フルーツ牛乳飲んで？」

リカ「そうそう。ここでほっとする事もあるだろうし、ここでしたか出会えない事ってあると思うし」

宮本「ユズ湯あったまるし」

リカの声「うん」

宮本「：昔、引きこもりだったんです。中学の頃」

リカの声「そっか」

宮本「あの頃って自分もその周りも真っ暗で：どうしてだろ。正しいって思った事、伝えただけなのに」

リカの声「そういう時、あるよね」

宮本「あの子もきつと今、真っ暗なんだろう  
な」

リカの声「：」

女湯からは全く音がなく、水音もしない。  
い。

宮本「お風呂はいつてます？：リカさん？」

リカの声「もちろん、はいつているよ！」

宮本「ここでしか言えない事、ありますね。

万の湯、最高」

リカの声「：ありがと、保坂さん」

○ 銭湯・女湯

リカ、服をきたままであり、銭湯に入  
っていない。

湯舟に浮かぶユズをじっと見ている。

銭湯の床のタイルが剥がれている。

○ 宮本の部屋（夜）

宮本、クリスマスマスソングの鼻歌を歌い  
ながら、うどんを茹でている。

つけあわせに金ピラを作っている。

○ 銭湯・番台（夜）

リカ、クリスマスマスのサンタの帽子をかぶって番台にすわっている。スマホを気にしており、時々みている。

お客は誰もいない。

慎太郎がホールケーキの箱をもってやってくる。

慎太郎「ケーキ、買ってきたぞ」

リカ「でかつ！それ、人で食べるの？」

慎太郎「母さんいたら、絶対これだったろ」

リカ「そっか：そうだね」

慎太郎「あの金平、呼べばいいんじゃないか？」

リカ「イブの日に、わざわざ銭湯くる人、珍しいよ」

慎太郎「あいつ、そうとう珍しい奴だろうが」

リカ「：」

S N S の着信がある。

リカ「あ」

慎太郎「来るなら、ケーキくらい奢ってやるぞ」

リカのスマホのSNSの画面。金平うどの写真と、クリスマスのスタンプ。

リカ「画面見て」クリスマスじゃないじゃん」

リカ、SNSで『ケーキ食べる？』を打ち込み送ろうとした時、宮本から電話がかかってくる。

リカ、電話にでる。

宮本の声「外、みて！」

リカ「外？」

宮本の声「すごいよ、降ったよ！」

リカ「え？」

○ 銭湯・入り口（夜）

白い雪が真っ暗な空から降ってきている。

リカ「ホワイトクリスマスだ！」

宮本の声「久しぶりでびっくりした」

リカ「きれい！」

リカ、空を見上げ、空から落ちてくる雪をみる。

○宮尾のマンション・ベランダ（夜）

宮本「うん、綺麗ですね」

宮本、ベランダから空をみている。

遠くには、『万の湯』の煙突もみえる。

宮本「なんでだろ、ずっと見てられる（返事が無いので）…ん？リカさん？」

○銭湯・入り口（夜）

リカ、杖をつきながら一人ダンスを踊っている。

空を仰ぎながら回り続けるリカ。

足を滑らせて転倒する。

リカ「わ！」

宮本の声「え？リカさん大丈夫？」

リカ「大丈夫」

宮本の声「ケガとか本当に？」

リカ「大丈夫、大丈夫」

リカ、転んだまま寝っ転がって、空をみている。

慎太郎が、驚いた顔でリカを見ている。リカ、笑いながら泣いている。

宮本の声「何、笑って……」

リカ「雪、すごい綺麗……」

そのリカをみて、慎太郎は何も言えない。

○ほなみ信用金庫・外観

慎太郎がスーツをきて、来店してくる。

○同・窓口

窓口の席で慎太郎が座っている。

小林「お待たせしました」

慎太郎「：お前がきたのか」

小林「すいません。僕が担当です。初めからですけど」

慎太郎「金平はどうした」

小林「あの、僕では役不足でしょうか、ね」

慎太郎「：察しろ」

小林「理解いたしました。なので、あの：融資の話、正直に話していいですか？」

慎太郎「なんだ」

小林「銭湯でなければ、融資できます」

慎太郎「どういう意味だ」

小林「それは察し：」

慎太郎「：」

小林「（意を決して）つまり銭湯以外であれば、アパートだろうと駐車場であろうと融資できるってことです」

慎太郎「今日はそんな事、聞きたくてきたんじゃない」

小林「：呼んできます」

○同・宮本のデスク

宮本、デスクで保坂家の融資の資料を  
みている。

小林「課長、僕じゃ無理です」

宮本「：言いつづらかったか？」

小林「（ちよつと考えて）まあ」

宮本「わかった」

○同・窓口

宮本「申し訳ございません。先ほどの小林にかわつて」

ス―ツ姿の宮本、挨拶しながら現れる。

慎太郎「お前も、ちゃんとした社会人なんだな」

宮本「はい？」

× × ×

宮本と慎太郎、向かい合い席に座っている。宮本持ってきた書類を出しながら

宮本「この資料から説明しますと」

慎太郎「お前、いくつだ？」

宮本「えっ？」

慎太郎「いくつになるんだよ」

宮本「トトになります」

慎太郎「親はどうしている？」

宮本「田舎で元気にやっています」

慎太郎「そうか」

宮本「あの、今日は融資のことです」

慎太郎「去年、妻が死んでな、かなり凹んだ

んだ」

宮本「：」

慎太郎「その時、リカに助けられた。あいつ

はいつも明るいからな」

宮本「はい」

慎太郎「今のはい、は本音か？」

宮本「え？」

慎太郎「本当にそう思うか？杖、使っている

んだぞ」

宮本「それは：」

慎太郎「リカはな、小っちゃい頃から我儘も、

泣き言も全然いわなかった」

宮本「：」

慎太郎「お前、引籠もっていたんだっけ」

宮本「はい」

慎太郎「その時、親と喧嘩して泣かせただろ？」

宮本「：自分の部屋の壁に穴が開きました」  
慎太郎「そうか」

宮本「あと、母親、殴ろうとして父親に殴ら  
れました」

慎太郎「いろいろやったな」

宮本「：はい」

慎太郎「うちはな、そういう事がないんだよ」

宮本「：」

慎太郎「なんでだか、わかるか？」

宮本「：わかりません」

慎太郎「リカが養女だからだ」

宮本「え？」

慎太郎「4歳の時にうちにきた」

宮本「じゃあ、本当の親は：」

慎太郎「交通事故で亡くなっている。リカの  
足が悪いのもそのせいだ」

宮本「なんで話したんです、そんな事：」

慎太郎「お前には、想像力が足りない」

宮本「：：」

慎太郎「（ぼそっと）金平野郎のくせに」

宮本「(はっとして)もしかして、クリスマス  
の日」

慎太郎「…」

宮本「やっぱりケガしたんですか？まさか、  
入院したとか？それで今日きたんです  
か？！」

慎太郎「…大丈夫。ちよつと転んだだけだ」  
宮本「よかった…あの、できればお見舞いに」

慎太郎「それだけ心配してくれば十分」

宮本「でも…」

慎太郎「いいんだ。年あけたら、また銭湯に  
来てくれ」

○ 銭湯の店の前

晴天である。

万の湯をしみじみと眺める、慎太郎。

○ 保坂家・台所

テーブルの上にはお雑煮と正月の料理  
が並んでいる。その中には金平ごぼう

もある。

リカ・慎太郎「あけましておめでとうござい  
まーす」

慎太郎「料理、上手くなっただな」

リカ「そういうお父ちゃんだって、頑張って  
作ったじゃん、これ」

リカが指さすのは金平ごぼうである。

慎太郎「意外と簡単につくれるな」

リカ「おかしちゃん、生きてたらびっくりし  
ているよ、きっと」

慎太郎「そうか？」

慎太郎、満足げな顔をする。

○宮本の実家・玄関口

正月飾りが家に飾られている。

○同・居間

宮本、こたつの中で寝っ転がっている。

猫のユズも横で寝ている。

早苗、宮本の寝姿をみて、

早苗「…息子といえども、おっさんやね。ユズちゃんの方が可愛いわ」

宮本「（寝ぼけて）んあ？」

早苗「一郎、あんた暇でしょ。これ持って、ちよつと手伝いにいって」

宮本「何それ？」

早苗「おせちとお菓子入ってるから」

早苗、風呂敷につつんだお重をみせる。

宮本「どこに？」

早苗「さつきの家」

宮本「なんで？」

早苗「お兄ちゃんでしょ！あんた」

○都丸家・リビング

散らかったリビング。

床には子供のおもちやが落ちており、洗濯物の山がソファーに置いてある。

都丸かなた（8）都丸はると（5）が、

宮本に走り寄ってきて、

かなた「ねー。一緒にゲームやるー」

はると「えー怪獣ごっこやるー」

宮本、かなたとはるとに囲まれる。

金髪頭の都丸功（わー）がやってくる。

都丸「お年玉ありがとうは言った？」

かなた「まだー」

はると「言っ てないっ」

都丸「はい、ちゃんと言う！」

かなた「ありがと！」

はると「ねー、怪獣ごっこは？」

走り回りながら話す、かなたとはると。

都丸、宮本がもってきたお菓子をせて、

都丸「食べたい人はどうするんだっけ？」

はると「手を洗うー」

かなた「ぼくもー」

はると、かなた、洗面所に走っていく。

宮本、嵐のように去っていった子供た

ちを呆然と見送る。

宮本、歩き出した瞬間、床に落ちてい

たレゴブロックを踏んづけてしまう。

宮本「いてっ」

都丸「あ、気をつけて」

宮本「なんだ、これ」

都丸「え？レゴ：」

宮本「そりゃ、わかるけど：」

さつきの声「助っ人、きた？」

リビングの隣の部屋の襖から、手がで

てくる。

襖が開き、畳部屋では、都丸さつき（38）

が布団の上で横になっている。

さつき「お兄ちゃん、がんばって。私むり、

動けない」

× × ×

宮本、山盛りの洗濯物を畳んでいる。

はるとは、その背中に乗っている。

はると「ねー、それ終わったら、いつしよに

遊ぼう」

宮本「はいはい」

かなた「ずるいー。俺とゲームする約束だろ

ー」

さつきは、隣の畳部屋で、布団に横に

なりながらそれを見ている。

さつき「かなた。その前に、自分のものは自分で畳んで」

かなた「もう、したもん」

さつき「じゃあ、イチロ―おじさんを手伝うの」

かなた「え―マリオしたいの」

さつき「それなら、おか―さんだって、あつ

森したい」

はると「僕はジャンプしたい」

はるとは、宮本の畳んだシーツの上にジャンプする。

宮本「ああああ」

さつき、爆笑。

さつき「いていていて」

宮本「笑うと、腰にくるだろ」

さつき「くるわ―。自分がぎっくり腰になるとは思わなかったよ」

宮本「疲れ、たまってたんだろ」

いさおが台所からでてきて、

いさお「はいー、みんなご飯」  
かなたとはると「はいー」

かなたとはると、台所に走っていく。

### ○ 都丸家・食卓

テーブルの上にはお重に入ったお節料  
理とホットプレート、肉やソーセージ、  
野菜などが並べてある。

はると、かなた、いさお、宮本が席に  
ついて、ご飯を食べている。

奥の部屋から、さつきの声。

さつきの声「私のごはんー？」

都丸「さつきちゃんは、ちょっと待ってって

ー

さつきの声「：はいー」

いさお、さつきのためにとホットプレ  
ートの肉を焼いている。

かなた「僕、おかーさんのために焼く！」

はると「えー僕もー」

宮本はそれを横目でみながら、自分の

ために肉を焼く。

× × ×

宮本、台所で洗い物している。

お風呂場から、いさおと子供たちの笑

い声が聞こえてくる。

さつきが、ハイハイのようにして、は

って台所にやってくる。

さつき「お兄ちゃん、ありがとね」

宮本、後ろで這って歩くさつきを見て、

宮本「びっくりするなあ、今日は寝てるよ」

さつき「トイレです」

宮本「あ：」

さつき、宮本のテキバキとした家事を

みて

さつき「お兄ちゃんって、意外と家事能力あ

るよね」

宮本「独り暮らし長いからな」

さつき「あのさ。なんで結婚しないの？」

宮本「ひとりのほうが、楽だろ」

さつき「それって、引きこもりしてた時に思

った？」

宮本「：：」

さつき「違うか」

宮本「違う。他人と生活するのは苦手だ」

さつき「じゃあ、私ならいいわけ？私、お兄

ちゃんの家族だよ」

宮本「：」

さつき「ごめん、変なこと聞いて」

宮本「：結局、モテなかつたんだよ」

さつき「そっか：」

さつき、トイレに行こうとハイハイで

動いていく。

宮本、それをみている。

さつき、トイレのドアの前まできて、

さつき「トイレのドアあけて」

宮本「あ：」

宮本、トイレのドアをあける。

さつき、立ち上がろうとするが、それ

をどう支えていいのかわからない宮本。

さつき、どうにか独りで立ち上がる。

さつき「うーん、痛いー」

宮本「：」

さつき「：お兄ちゃん」

宮本「うん？」

さつき「覚えてる？お兄ちゃんが引籠もりだった時、大事にしたたファイギア」

宮本「：覚えてるよ。母さんが、壊したやつな」

さつき「そう。お兄ちゃんがキレて、お母さん殴ろうとして、お父さんに殴られたやつ」

宮本「あれで入院して、それで引きこもりおわったんだよな」

さつき「うん」

宮本「結局、殴られて、よかったよな」

さつき「：それ本当？」

宮本「：」

さつき「恨んでない？お父さんの事」

宮本「：」

さつき「ずっと、後悔しているよ、お父さん」

宮本「：」

さつき「私は、あの時、うちの家おわったな、  
って思ったよ。あ、これで、うちの家族は  
もう無くなるんだなーって」

宮本「そんな事、ないだろ」

さつき「もろいよ家族なんて。お兄ちゃん、  
泣きながら夜中にお米研いだことないで  
しょ？」

宮本「：旦那となんかあったのか？」

さつき「（笑って）ない家なんか、どこにもな  
いよ」

宮本「：」

さつき「あのね……。お母さんが壊したと思っ  
てたフィギア、壊したの、私だよ」

宮本「え？」

さつき「あの頃、家の中で私だけ居場所がな  
い気がしてさ」

宮本「：：」

さつき「それで壊しちゃった」

宮本「なかつたのか居場所」

さつき「今はあるから安心して。ほんと、ご

めん」

宮本「別に：あんなのただの人形だよ」

さつき「：さて、トイレ、トイレ」

さつき、トイレに入ろうとする。

宮本「何か手伝うことって、あるか？」

さつき「こら！ここからは、自分で頑張るわ」

宮本「そっか（笑って）そうだよな」

さつき「安心してよ。お風呂も旦那に手伝っ

てもらってるし。仕事柄、介護道具はそろ

ってんの」

宮本「はいはい、さつきはそっちのプロだも

んなあ：へはっと気がついて）そうか、そ

ういう事：」

さつき「え？」

宮本「笑ってたのって：」

さつき「どうしたの？お兄ちゃん？」

さつき、宮本が何に気が付いたのかわ

かないので、きよんとする。

宮本とさつきが立っている。

～人は何やら大き目の荷物をもってきて

ている。

チャイムをならす。

慎太郎の声「あいてるぞ……」

### ○ 銭湯・女湯

さつき、持ってきた風呂用の介護用品をテキパキと配置している。

慎太郎「：妹さん、すごいな」

宮本「一応、そっちの仕事やってて」

慎太郎「そうか、そういうのあるんだな」

宮本「リカさん、何時ごろ帰ってきます？」

慎太郎「あと一時間くらいかな」

宮本「それってすぐですね」

さつき「ちよつと、お兄ちゃん！これ動かし  
て。私、腰痛いんだから。ぼーと立ってな  
いの」

宮本「はい、はい」

さつき「はい、はい、一回！」

宮本「はい！」

さつき「あと、そこのお父さんもちよつとき  
て」

慎太郎「は、はい」

× × ×

床には滑り止めのマットがひいてある。  
湯舟の手前には、手すりなどが置いて  
あり、リカが危なくないように整備さ  
れている。

風呂場でニコニコと笑って、立ってい  
るのは、さつきである。  
さつきは、短パンにＴシャツで入浴介  
助ばつちりの恰好である。

リカ「：なにこれ？」

宮本「考えました」

リカ「：」

宮本「自分ができる事。自分がしたい事が何  
なのか」

リカ「：」

宮本「あなたの足は、笑われるためのものじ

やない。あなたの足は、ずごく、ずごく、大切ですよ」

リカ「：なんで、今更そんなこと言うの」

宮本「それは：」

慎太郎「そりゃ、金平だからだろ」

リカ「：」

さつき「さ、私がサポ―トするんで、入って

ください」

宮本「妹にお願いして、きてもらったんで」

リカ「そんな、わざわざ」

さつき「いいの、いいの」

慎太郎「：ほれ、はいつてやれ。ちゃんと金

平と風呂入ってこい」

宮本とリカ、顔を見合わす。

慎太郎「：言っとくけど、お前はそっちだか

らな」

慎太郎、男湯を指さす。

○ 銭湯・女湯の脱衣所

さつきが、脱衣所に待機している。

女湯に入っているリカに向かって

さつき「リカさん、聞こえます？」

リカの声「はい」

さつき「私ここにいるんで出たいときは呼ん

でくださいねー」

リカの声「はい」

### ○ 銭湯・男湯

宮本、お風呂につかっている。

女湯のほうを気にしている。

リカの声「あー」

宮本「どうしました？！」

リカの声「あ、気持ちいいなって」

宮本「びつくり、させないでください」

リカの声「ごめん、ごめん」

### ○ 銭湯の女湯

リカ、介助道具をつかってお風呂に入

っている。

リカ、銭湯の天井を眺めている。

湯気で煙っている天井。

宮本の声「なんか、言ってください」

リカ「え？」

宮本の声「ちゃんと入っているか不安になる

んで」

リカ「ユズ湯にしたいな」

宮本の声「え？：今日準備してない」

リカ「来年ね」

宮本の声「あ、はい」

リカ「そうだ。その時は、こっちに一緒に

いってよね」

宮本の声「はい。え？えええええ？？？！！！」

### ○ 銭湯の男湯

宮本、おもわず立ち上がり、滑って溺れそうになる。

リカの声「大丈夫——？」

宮本「だ、大丈夫です——」

リカの声「よかった」

その声をきいて、宮本、なぜか涙がで

てくる。

○ 銭湯・女湯の脱衣所

さつき、二人の話声を聞いている。

さつき、すこし微笑んでいる。

○ 銭湯・番台

番台に座っていた、慎太郎。

番台から降りて、フルーツ牛乳の本を冷

蔵庫から取り出してくる。

そのフルーツ牛乳の瓶を番台の上におく。

おわり